

石井委員、ならびに熊本市教委のご報告についての意見等

教育課程部会 市川伸一

◆石井委員のご報告について

歴史、制度、学習・教育論にわたる幅広い概観と整理になっており、あらためて勉強させていただきました。まだ理解し切れていない点もありますが、後半に述べられているこれからのカリキュラムが寄って立つべき理念にはたいへん共感いたします。とくに、個別最適化の議論が、ややもすると学習を「早習」の観点からのみとらえがちになるのに対して、「拡充」の視点から相対化しておくことは、言葉は違いますが、私が2月6日の発表でも言いたかったことですので、強く賛同いたします。

1点、補足していただきたい点がありました。「真正 (authentic) な学び」が一つのキーワードになっており、これは、新学習指導要領の「社会に開かれた教育課程」とも密接に関連していると思われますが、論者によって意味が多少異なるように感じられます。状況的学習論のように、かなり限定的な意味にとらえるのか、それとは違う意味でなのか、この論文ではどういう意味合いなのかを知りたいと思います。とくに、専門外の方にとっては、この言葉自体も、なじみがないと思われますので。

あと、2点、これは、今後の議論としてです。一つは、同じように、学習科学、ヴィゴツキー、インクルーシブ、協働性などを背景としてもっている教育論でも、実際の授業設計ではかなり隔たりがあり、相互排他的なものもあります。そこには、別の要因が働いているためでしょうが、「インクルーシブで真正な学び」を実際に学校に実装 (implement) するにあたっては、どのような考え方がありえ、また、有効なのかを明確にしていく議論や実証が必要かと思いました。

もう1点は、学校教育と地域との関わりをどうとらえ、システム化していくかという点です。いま、地域は学校の支援者というより、子どもの教育を学校と分かち合うパートナーであると位置づけられ、文部科学省も地域との連携・協力を大きく打ち出しています。学習の「拡充」を図るときにも、社会人とともに学ぶ機会を充実させることが不可欠になりますが、学校教育と社会教育・地域教育をどう結び付けるかはまだ政策も実践もまだまだすすんでいないように思います。

今後の論点として、必要になるかと思い、述べさせていただきました。

◆熊本市教委のご報告について

授業の様々な場面でICTがフルに活用されているという印象を受けました。最初、ICTの効果的な活用として、「短時間で学習内容を習得し、授業時数を削減することができた場合、残りを探究的な活動にあてることができる」とあるので、習得の学習の効率化だけにICTを使っているのかと思いましたが、スライドの中身を見ると、探究学習の

中でも使われていることがわかりました。

しかし、そこでも強調されているのは、「時間短縮」なので、全体として、ICTを使うと便利になって効率化できるという点が強調されすぎているのが気になりました。これも、2月6日の私自身の発表でいえば、ICTを学習者がツールとして使うことによって、学習の質自体が高まるということも打ち出していただけるといいと思ったしだいです。

具体的には、レポートや作文にしろ、発表や創作にしろ、コンピュータのメリットは、何度も編集し直して質の高いものができることにあります。また、検索した情報や数値データを加工したり分析したりするのも、コンピュータがあってこそです。今後、小中学校からそうした学習が求められるはずです。

ICTを子どもが使って、どういう資質・能力が高まったかが問われたときに、「仕事や学習を効率的にできる力」だけではなく、批判的思考、創造的思考、コミュニケーション力などが出せるといいと思います。そうした深い学びをするツールとして、学校でもICTが活用されて成果を出しているところを、活動の様子や制作物を通して見せていただけることを期待したいです。

勝手なことを申し上げましたが、以上です。